

久留米

通高 信専

2008年春号

[APRIL 25, 2008]

久留米工業高等専門学校企画主事室
〒830-8555 久留米市小森野1-1-1
TEL:0942-35-9300
<http://www.kurume-nct.ac.jp/>

卒業生に贈る言葉

～「創造性」「広い視野」「豊かな心」～

前田 三男



まずは「自立の精神」を

日本の教育制度は、もともと世界的に見ても優秀だといわれ、それが経済成長を支える大きな要因でした。ところが近年、初等中等教育においても高等教育においても、日本の教育制度に対する様々の問題が指摘され、現在大きな見直しの時期にさしかかっています。画一的な日本の教育制度の中であって、我が国の教育界では少数派ですが、5年にわたる一貫した技術者教育という、高専のユニークな教育システムの良さが、今改めて見直されています。

しかしながら、高専が設立された40年前と今では、日本を取り巻く環境が大幅に変わっています。産業界に関してそれを一言で表現すると、追う側の立場から追われる側になったということでしょう。韓国、中国、インドといったアジアの国々が、かつての日本と同じ道を歩みつつ、大きな発展を遂げようとしています。また、地球環境問題もこれからの技術者に負わされた大きな課題となっています。そのために高専を卒業する技術者に対する社会の要求も、おのずと40年前とは違ったものになってきました。

久留米高専はその基本的な教育理念として、一貫して「自立の精神と創造性に富み、広い視野と豊かな心を兼ね備えた、社会に貢献できる技術者の育成」というのを掲げています。私はその中で在校生の人たち、特に入学生にはこれまで「自立の精神」というのを強調してきました。「創造性」も「広い視野」も「豊かな心」も「自立の精神」なくしては育ちません。なによりもまず、自立した一人の人間としての個性を確立することが、第一だと思います。「自立の精神」はこれから社会人として生きてゆく諸君にとってはさらに重要なことで、その自立の確かさを試されるような事態が起こることもあるでしょう。

技術の継承と創造

それはそれとして、卒業にあたって、今回はこれまであまり触れ

なかったあとの三つキーワード「創造性」「広い視野」「豊かな心」についてお話ししたいと思います。まず「創造性」について、研究者や芸術家に創造性が求められるのは当然のことですが、技術者にも創造性が求められる時代になっています。激しい国際競争を勝ち抜くには、なにか革新的な技術の創出が常に求められます。日本の芸術分野には「家元制度」というのがあって、それによって、たとえば雅楽とか能のような古典的な芸能がかなりオリジナルな形のまま現在まで受け継がれてきました。テクノロジーにはそれまで築きあげられてきたノウハウを受け継ぎ、伝承してゆくといった面が確かにありますし、それは大事にしなければなりません。



それに対して、ルネサンス以降の西洋の文化には、常にそれまでと違った何か新しいものを創造することが学問・芸術を目指すものの使命であり、社会もそのことに大きな価値を見出すといった基本思想が生まれました。西洋の大学生を見ていると、才能があるなしにかかわらず、「自分の個性に根ざした何か新しいものを編み出さないといけない」といった雰囲気教育されてきたことが、よく分かります。確かに何か新しいものを創造するには一種の才能が必要です。誰でもが世の中を変えるような革新的なアイデアを創出することはできません。しかし多くの技術者が「自分にしか思いつけない創造性を発揮することは素晴らしいことなのだ」と常に思いつく仕事をするのは、非常に大切なことです。

テクノロジーは文化の担い手

次に「広い視野」と「豊かな心」ですが、これは実に漠然としていて、色々な解釈ができそうです。まず技術者にとって「広い視野」と「豊かな心」とは何なのでしょう。それは、これまで学んできた専門分野を超えて、大きくいえば人類がこれまで築いてきた文化に目を向けることです。もちろんそれ以前に技術者としてのしっかりした基盤を持つことが前提です。専門分野を持たない知識人は単なる物知りにすぎません。私はこれからの技術者には「テクノロジーは人類文化の担い手である」という認識をもってほしいと思っています。

産業革命以後、技術はそれまでよりはるかに人間生活そのものに大きな影響を与えるようになりました。その度合いは近年ますます激しくなり、社会そのものの構造を変えるまでになったことは、交通機関とかIT技術を例に挙げればすぐにおわかりでしょう。そのために世の中に受け入れられるいい製品を作ろうと思うと、文化そのものに対する洞察が技術者にも要求されます。日本を追ってくるアジアの国々に差をつけるには、製品に込められた「文化のレベルの高さ」で勝負するしかないとは私は考えています。

「技師道」をめざせ！

話が抽象的すぎるので、若い諸君にもわかりやすい例でお話ししましょう。カメラの発明が美術に大きな変革を促したのと同様に、エジソンによるレコードの発明は、音楽文化を変えました。音楽を聴く形態そのものが変わった訳です。さらに最近のことになりますが、ソニーという会社がウォークマンを発明しました。コンパクトカセットはオランダのフィリップス社の創案ですが、それをうまくアレンジしたウォークマンは音楽を持ち歩ける形にした点で画期的でした。音楽が好きな世界中の若者の間で、ウォークマンの名を知らない人はまずいないでしょう。日本が生み出した「文化」の一つだと私は思っています。ところが最近アップル社が売り出した iPod は瞬く間にウォークマンを駆逐してしまいました。もちろん iPod は最新の技術で支えられていますが、それ以上に、背後に時代を見通す斬新な視野を感じます。繰り返しますが、皆さんは技術者として、テクノロジーは「文化の担い手である」という認識を持ってほしいと思います。文化こそが技術者としての「広い視野」と「豊かな心」の源泉です。

「スペシャリスト」を養成するか、「ゼネラリスト」を養成するかというのは、教育界でよく論議される問題ですが、視野が狭くては真の「スペシャリスト」にもなれません。日本には昔から「ナントカ道」というのがたくさんあります。武士道というのが昔から外国でも有名ですが、芸術分野では茶道とか書道とか華道、スポーツでさえ柔道とか剣道とか称して、それを人生の修養の場とする傾向が日本人にはあります。これは専門を究めることによって、それをより普遍的な人生の指針にまで高めようとする意志の現れです。私は

技術者の場合にも、「騎士道」ならぬ「技師道」というのがあって、もいような気がします。卓越したプロのスポーツ選手を見ると分かるように、どの技術も突き詰めてゆくとそれなりの深さがあり、「極意」と呼べるようなレベルを会得した人には、他の分野にも共通する何かが見えてくるのでしょうか。技術者を目指すなら、「技師道」を目指して、まずは「プロ根性」を養うと同時に、広い普遍的な視野を育ててほしいと思います。

技術者の社会的責任

もう一つ申し上げたいのは、テクノロジーが社会生活に大きな影響を与えるようになるにつれ、そのマイナスの局面が、大きな社会問題になってきていることです。一時代前の核戦争の問題とか、最近の地球環境問題がその典型です。テクノロジーは社会的な価値観によってある評価基準が与えられると、お互いに競い合いながら、その性能をどこまでも高め、進歩が止まらなくなるという性質があります。この10年ほどのコンピューター技術の進歩を見ると、テクノロジーが本質的に持つそういった「あやうい性格」がよく分かります。このままコンピューター技術が無限に進歩すると、SF映画に出てくるように、全世界のコンピューターが悪者によって制御されて、人類が危機に瀕するといった事態が起こらないとも限りません。最近急速に発達しつつあるバイオ産業も、そのうちに人類に害悪をもたらす存在になるかもしれません。

科学技術がもたらした当面の深刻な課題は地球環境問題であることは、諸君もよくご承知のことです。大変難しい問題ですが、テクノロジーの社会に与える影響がこれだけ大きくなった現在、すべての技術者が自分の仕事に対して社会的な責任を持ってほしいと思います。それと同時に、テクノロジーの進歩によって起こった問題を解決できる手段は、唯一テクノロジーしかないということも、強調しておきたいと思います。

社会人としての「広い視野」と「豊かな心」

最後に、社会人としての見地から「広い視野」と「豊かな心」について考えてみましょう。学生時代には自分の成績を上げようとする、一生懸命勉強すれば、それなりの成果が得られたはずで、ところが会社の中で成績を上げようとして、一生懸命頑張っても、必ずしもそれが君自身の成果として戻って来ない場合があるかもしれません。会社での多くの仕事はチームプレイであって、個人の働きより、会社のためにその人が与えられた役割をいかにうまく果たしたかが、評価の基準になります。会社で昇進すると、「部下をいかに使うか」という能力が試されます。さらに会社以外の人間関係でも、将来皆さんが結婚して家庭を持った場合でも、幸福な生活を維持していくためには、自分が置かれている立場を客観的に見ることが出来る「広い視野」と、円滑な人間関係を維持するための「豊かな心」とが、大きな役割を果たすであろうことを、申しあげたいと思います。

高専生活を振り返って

機械工学科 國武 勇志

高専で過ごした5年間はあっという間で、入学したのがつい最近の出来事のように感じます。入学した当初の私は、機械関係にあまり興味を持っておらず、これからやっていけるのか不安な気持ちでいっぱいでしたが、今では将来やりたいことも見つかり、この5年間でさまざまなことを経験することができました。その中でも部活動は私にとって青春であり、人として成長するきっかけを与えてくれました。野球部に入って失敗もたくさんしましたが、仕事に対する責任感、礼儀・けじめの大切さなど、得られることは多く、これからの私の人生にとって財産になると思います。お世話をしてくださった先生方、毎日サポートしてくれたマネージャー達、一緒にプレイした部員みんながいたからこそ貴重な経験ができました。

私はこの春から大学に進学します。高専生活で学んだことに自信を持って、これからも成長していきたいと思います。5年間お世話してくださった先生方、一緒に高専生活を送ったみんなに感謝したいと思います。本当にありがとうございました。

高専生活を振り返って

制御情報工学科 岡部 広

入学してからもう5年が経ちました。まだ、あまり実感がわいていませんが卒業です。入学当初、一般科目の授業ばかりで高専に入ったのは失敗だったかなと思ったこともあったけど、だんだん専門科目が増えてきて短期インターンシップや工場見学旅行などすごく充実していてやっぱり高専に入ってよかったと思いました。特にこの最後の1年間はすごく思い出深いものとなりました。

また、就職活動も遅く始めたのですが会社からの募集が非常に多く受ける会社を決めるのにすごく迷いました。1社目の試験を受けたとき、ほかに普通の大学生がいてみんな5、6社くらい内定待ちだと聞いてかなり不安になり、1社目で内定をもらえたときはほっとしました。就職率がいいのも高専を選んでよかったと思う要因の一つです。

高専に入っていることばかりあったわけではありません。教室がすごく汚れていたり、授業中の話し声が大きくてうるさかったりといういろいろな不快な思いもしました。でも、そんな嫌な思い出よりもたくさんの楽しかった思い出があります。この高専生活の中で得たものはそんなたくさんの思い出と仲間ではないでしょうか。そんな仲間たちとも卒業すればお別れです。寂しい気もしますが新しい生活に期待が膨らみます。

最後にこの5年間お世話になった先生方ならびにクラスみんなに感謝の気持ちを述べたいと思います。本当にありがとうございました。

卒業に向けて

電気電子工学科 坂口 聖和

私は今、卒業旅行の地、沖縄にてこの文章を書いています。今年の卒業式は例年より遅いため、皆がこうして揃うのは、この旅行が事実上最後となります。卒業式に全員が参加できないというのは少し寂しいものですが、今はとりあえず旅行を楽しんでいます。先ほどまでホテルの一室に集まって、ワイワイやっていました。普通とはちょっと違った雰囲気で、うまく言えないのですが、将来の話や結婚についての話で盛り上がっていました。

閑話休題。最後なので、私は前々から気になっていたけれど、聞く必要も無いので放っておいた疑問を引っぱり出してみました。「このクラスの中で苦手な人、いた？」

卒業までほぼ同じメンバーで過ごしてきました。いくつかのグループに分かれていましたが、体育会系も、おとなしめも、ゲーム・マンガ系も、みんなで協力してなんとか生き延びてきました。多分私のクラスは仲のいいほうです。クラス42名、1対1だと861組の人間関係はどのようなものだったのでしょうか。それとなく聞いてみました。

——案外みんな苦手な人がいました。5年間一緒にいたのに気づかなかった不仲や、昔は苦手だったが今はそうでもない、といったそれぞれの思いを高専生活の最後に知りました。

集団で何かを為すためには、苦手な人と付き合っていくことも必要です。そういうことをクラスの仲間たちも考えていた、ということもさっき知ったわけです。こうしてみると「なんだかんだでいいクラスだったな」という皆の感想は、とても感慨深いものがあります。

この文章を読んで、疑問や違和感を感じる人がいるかもしれませんが、もちろん私のクラスはとても熱く、楽しいクラスです。いわば青春そのものですから。しかし一方で、苦手な人も付き合っていくことも必要だと皆が考えられるようになったから今のようなクラスができた、と私は考えたいのです。自分でも不思議なのですが、これらの感情は同居が可能なのです。少なくとも私には。

私があえてこのような話を書いたのは、学生生活の美しい面や素晴らしい点ばかりを取り上げることが、これを読むかもしれない後輩たちに役立つとは限らないと思ったからです。だから、こういった少し薄暗くて湿り気のする話を、私たちが少し大人になった実感を、体験として書きました。

みなさん、がんばってください。

「高専生活を振り返って」

生物応用化学科 宮崎 智子

この5年間の高専生活では、今までに経験したことのないたくさんの方に挑戦し、毎日楽しく充実した日々を送ることができました。特に3年までは、このために学校に来ていると思っていたほど、部活(弓道)に明け暮れていました。最初にスランプに落ちた時、先輩が自分の練習を割いてどこが悪いのか、どうしたらいいのか、と親身になって付きっきりで考えてくれました。そのとき、この学校、そしてこの部活に入って良かったと心から思いました。その後スランプに落ちた時も、先輩や、先生、仲間達に助けられ、乗り越えることができました。そして、何百、何千射に一回出るか出ないかの射が出た時の感動は、忘れることができません。一緒に悩み、喜ぶそんな仲間に出会えて本当に良かったと思います。部活外でも上下関係なく旅行に行ったり、私にとって家族のような存在でした。仲間への感謝の気持ちと、感動と、仲間の大切さなどたくさんのごと学ぶことができました。

クラスでは、一緒に勉強し、留学生を送る会、文化祭、体育祭とみんなで団結し、笑ったり、泣いたりいろいろな出来事がたくさんありました。そんなクラスの級長として5年間やってきました。一度は自分には向いてないと思って辞めようと思いましたが、クラスみんなの支えがあって5年間無事に続けることができ、本当に良かったと思います。よく考えると、現人生の1/4を過ごしたこの高専生活、長いようで短く感じられたこの5年間は、たくさんの人達との出会いがあり、さまざまなことを学び、悔いがないとても充実した日々でした。

今回卒業を迎えることができ、支えてくれた先生方、友達、陰ながら見守ってくれた家族に本当に感謝しています。これから、みんなバラバラになるけど、高専で出会った人達とのつながりを大切にしていきたいと思っています。



～卒業にあたって～

材料工学科 下釜 江美子

高専で過ごした5年間は短かったように思えるが、やはり振り返ってみると多くの出来事が思い出される。

高専に入って最初に驚いたのは授業時間が1時間半だということ。次に驚いたことはテストが60点以下は赤字だということ。この普通の高校にはない2つ驚きは私を5年間苦しめた。何度、眠気と戦っただろう。何度、再試を受けただろう。材料の専門の授業も始めはどのように勉強したらいいのか分からず、何度も泣いた。

しかし、辛いことばかりではなかった。高専に入って、クラスや、部活、他の学科にも多くの友達ができ、特に一緒に入学した材料の女の子とは毎日、話しては笑い、辛いことがあれば一緒に泣き、励ましあった。クラスマッチや高専祭では、みんなで協力し合うことがとても楽しかった。私が高専を卒業できるのは友達が近くいて、支えてくれたからだと思ってしまう。

私は4月から会社で働くことになっているが、高専で出会った人達の支えを無駄にしないよう仕事に励んでいきたいと考えている。そして、立派な大人になって次は私が誰かを支えていきたい。

最後に久留米高専の先生方、高専で出会った人達、家族、そして最もお世話になった同じクラスの高田さん、高倉さんに心からお礼を言いたい。迷惑かけたと思うけど、支えてくれて本当にありがとう。



専攻科修了にあたって

機電システム工学専攻 中島 徹

僕は本科と専攻科、通算で7年も高専に通いました。僕が高専に入った頃、専攻科という存在があり、7年も本校に通っている人を知ったとき、「7年間も同じところに通うなんて考えられない」と思っていました。本科1年の16歳からみれば専攻科2年の22歳なんておじさんに見えますし、無理もないことです。でも、なんだかんだで7年もすぐ過ぎてしまうものですね。光陰矢のごとし。

それにしても10代という多感な時期に7年間も同じ学校で過ごしてきたので、久留米高専を通してたくさんの影響を受けてきたと思います。専門分野の技術もさることながら、授業を通して知った事や友人から学んだ事が数多くあります。中でも印象に残っているのは、インターンシップや学外での授業、商店街でのまちおこしの活動です。

一般の人と交流して物事を進めるのは非常に刺激になり、学んだり考えさせられる点が数多くありました。

あと、後輩の皆さんに言っておきたい点があります。勉強はしっかりやっておいた方が良いです。僕はしっかり勉強をしていなかったため後悔している部分が大きいです。特に英語はやっておいた方が良いです。高専は英語教育が弱いので、自分で勉強しておかないとともな力がつきません。

久留米高専には数多くの良い点があります。しかし、大きな欠点として人との出会いが少ないという点があります。普通高校や大学と違い、少なくとも5年間は同じクラスが続くので、出会う人の数が基本的に少ないです。これは大きなデメリットだと思います。

そのため、部活なりバイトなりをしてクラス以外で人のつながりをつくっておいた方が良いと思います。人のつながりは多すぎて困ることはないですし、なにしろ楽しいと思います。

「専攻科修了にあたって」

物質工学専攻 宮崎 有功子

7年間は長いような短いような…。意外とあっという間でした。

高専への入学は中学生時代の私の夢でした。姉の友達が高専生で、茶髪にピアスそして化粧。楽しそうに自由で憧れました。一方のうちの姉は、普通高校で厳しい校則に朝夕の課外授業。憧れるはずがありません。こうして私は久留米高専生物応用化学科に入学しました。“楽”がしたくて入った上、第2志望の学科だったので特に化学や生物に興味があるわけでもなく…。程なく授業が始まりました。化学の授業が多く、授業の進む速度が速い。ノートをとるだけで必死です。こんなんで5年間大丈夫かなと思いましたが、意外と大丈夫でした。分からないところは友達に教えてもらったり、先生に聞きに行ったり…。2年生になった頃には化学が結構好きになりました。4年生の時には研究員になりたいと漠然と思い始めました。進学。大学編入には失敗しましたが、専攻科に入学しました。『また高専か…』と思いましたが、『大学院に向けて勉強を頑張ろう!!』と初めは意気込んでいました。が、卒業研究に行き詰まり研究員になりたいという夢は儚く散り…。スパッと諦めて就職することにしました。就職は学校推薦ですぐに決まりました。こんなに簡単でいいのか？というくらいすぐに決まりました。こんな感じで私の7年間は終わりました。

入学当初に考えていた“楽”ができたかは謎ですが、茶髪にピアスそして化粧。一通りやったので、これで良かったんだと思います。時には『普通高校に行って違う道に進めばよかった』なんて事も考えるけれど、7年間を終え、私には高専が、化学が合っていたんだと思えます。高専に入学して卒業し、また専攻科に入学して修了して本当に良かったと思います。

退職教職員からの言葉

退職にあたって

機械工学科 平 彦 国男



昭和63年4月九州大学より本校機械工学科に赴任し、本年3月定年退職するまで20年間にわたり本校で教育と研究に携わることができました。その間をふり返ってみますと、前半10年と後半10年に分けることができます。前半の10年では、NHKロボットコンテスト、本田エコラン競技、柳川ソーラーボート大会などの課外学生指導が印象に残ります。ロボットコンテストでは第1回大会から参加学生の指導に関わり、全国大会において連続して準優勝、優勝、準優勝の手助けができ、久留米高専の黄金時代に顧問として参加できたことを誇りに思っております。

後半の10年はJABEEプログラム審査をはじめとする、いわゆる教育改革に振り回されることになりました。平成15年、JABEEプログラム試行審査を高専としてはじめて受審することになり、プログラム責任者として、試行認定審査を受審したことはとくに印象に残ります。審査結果は不合格でしたが、その後の本審査に大いに寄与できたものと思っております。試行審査において、図書館の仮住まいでアブラゼミの鳴き声を聞きながら、機械工学科教員全員で資料作成に汗を流したことは、今となっては懐かしく思われます。

ただ、残念なことは20年間も教壇に立ちながら、教え方にあまり進歩がみられなかったことです。本校発展のため、他山の石としていただければ幸いです。

久留米高専を去るにあたって

事務部長 金子 馨



私を大きく育ててくれた、「高専」に感謝し、ありがとうございましたと言いたと思います。有明高専29年、佐世保高専約3年、久留米高専2年と約34年間も勤めさせていただきました。一般職員から事務部長まで課長補佐(専門員)を除いて、また、学生からの相談や顧問教員がいなくなったクラブ指導など貴重で、様々な体験をさせていただきました。その3高専での取組やあらゆる職種の経験と大学での経験を、久留米高専で十分活用できなかったことが、心残りです。

そのひとつが、過去のことを何時までも引きずって、改革等に抵抗があったことです。確かに急激な改革は、精神的に弱い人は心を病むこともあります。世の中の流れとして改革等は避けられませんが、組織の存続、活性化、良い学生を育てるシステム、自分たちの生活を守りながら、傷つく人を作らずにやっていくことはできると思います。

「他人は他人、自分の仕事以外は協力も干渉もしない。」という個人主義を捨て、組織や予算が小さくなって行く中、一定の教育、事務サービスを維持するために、自分の仕事以外にも一歩踏み込んで行くべきです。そのための研修、自己啓発はおしまずに努力すべきです。また、仕事以外の作業や集まりにも積極的に参加し、お互いの意志を確認し、協調することによって、安定した組織や自分たちの生活も長く続いて行くと思います。

少し不都合があっても、施設の有効活用、組織の活性化、他の人の待遇改善等がなされるならば、自分に都合の良い理論は捨てるべきです。久留米高専が早く将来構想を確立し、学生の教育に、人材や施設の効率的活用に取り組み、ますます発展されることを願ってお別れのことばとしたいと思います。

人事交流を振り返って

一般科目理科系 酒井 道宏



昨年度、人事交流制度(いわゆるレンタル移籍)で岐阜高専から本校に転任してもうすぐ2年が経とうとしています。楽しく有意義な時間というものがあったという間に過ぎてしまうものだと実感しています。これまで教職員や学生の皆様に

どれだけお役に立てたかと思えば、全く思い浮かばずとても後悔しています。せめて感謝の気持ちだけでも伝えたいと本稿の執筆依頼を引き受けさせていただきました。

私は岐阜高専に赴任する前の2年間、本校の非常勤講師として授業に携わる機会があったのですが、まるで大学のようなアカデミックで自由な雰囲気に驚いた記憶があります。学生はとても気さくで私を慕ってくれまして、よく昼食を一緒に食べに行ったりしました(もちろん奢られました)。当時は九州大学でオーバードクターとして殺伐とした研究生生活を送っていたので、学生と楽しい時間を過ごすことは私にとって貴重な安らぎのひとつでした。また、どんなにレベルの高い試験でも満点を取るホームランバッターのような学生が多くいたことも印象的でした。

人事交流制度で久留米高専に戻ってきて授業とクラブ活動を中心に本校に携わることになりました。良いクラスに恵まれたのか、授業は相変わらず楽しくさせてもらいました。熱心に質問に来る学生も多く、非常勤時代では味わえない経験をさせていただきました。また、学生には私の癖字によく我慢してくれたのだと感謝しています。このように快適に数学教育が出来たのは、ひとえに川越先生、中坊先生をはじめとする数学科教員の皆様のご協力によるものであり、この場を借りて心より感謝致します。

クラブ活動では野球部を担当しました。楽しい思い出は沢山ありますが、中でも高専大会での痺れるような試合を学生と一緒に過ごせたことはとても良い財産になりました。このような貴重な経験ができたのは渡邊先生、熊丸先生をはじめとする顧問の皆様、吉村監督、(敏腕)マネージャー、そして選手の皆さんの支えに他なりません。心より感謝致します。岐阜高専でも野球部の顧問をする予定ですので、再会を心待ちにしています。

最後になりましたが、何かと至らない私を温かく受け入れて下さった久留米高専の教職員ならびに学生の皆様に厚く御礼申し上げます。皆様の健康と御活躍を心より願っております。

久留米高専での二年間の教員交流を終了するに当たり思うこと

生物応用化学科 野坂 通子



2006年4月、久しぶりの緊張感と期待をもって、佐世保高専から久留米高専に赴任致しました。あっという間に二年間が過ぎて、ここを去るのがとても名残惜しく感じています。学科を越えて多くの教職員、技術職員、事務職員の皆様方に、大変お世話になりました。有難うございました。

私が接する事ができた久留米高専の先生方は、プライドを持って仕事をしておられる事がすぐわかりました。学生に口うるさく言わないのも、学生を大人として扱っておられるからだと思います。在籍させて頂いた生物応用化学科では、先生方の学生に対する責任感と愛情を強く感じました。学科会議では合理的に議事が進められています。良いと判断されたものは積極的に採用する一方で改善すべきは即実行するという、あるべき姿に佐世保高専でのこれからの仕事に対する勇気を頂きました。担当教科で印象にあるのは、私にとって初めての"情報リテラシー"でした。最初はゆき違いもあって、学生の皆さんに不満を持たれましたが、それが自分にとって反省する良い材料となりました。

久留米高専の自然環境は本当に素晴らしいと思います。ゆったりと流れる筑後川の辺で、明るい空に映える美しい桜と銀杏の並木、二ホンタンポポがセイヨウタンポポに駆逐されずに元気で咲いている事にも感激しました。ここには私が子供の頃に接した豊かな自然が残っています。学生の皆さん、この貴重な環境を大切に有意義な毎日をご過ごしてください。ゴミを放置せず、責任を持ってゴミ箱に分別して捨ててくださいね。お元気で!!!

現代GP海外視察

高専通信 2007 年秋号に掲載した本校の現代 GP の一環として、本校の技術教育をよりよいものとするために、本校の森先生、中坊先生、中尾先生、渡邊先生がオーストラリア、シンガポール、イギリス、フランス、ドイツ各国の技術養成機関を視察に行かれました。次の記事は、オーストラリアに視察に行かれた森先生の報告です。

オーストラリアの公立専門学校 (TAFE) の訪問調査報告

生物応用化学科 森 哲夫

平成 19 年 11 月に、西オーストラリア州で最大の都市であるパースにある州立の総合専門学校 TAFE (Technical And Further Education) を 3 校、訪問しました。

オーストラリアには日本の中学校に相当する Junior Secondary School (7 ~ 10 学年)、高等学校に相当する Senior Secondary School (11, 12 学年) があり、10 学年までは義務教育です。10 学年を修了すると、大学に進む為の準備としての Senior Secondary School に進む生徒、TAFE に進む生徒、および就職する生徒に分かれます。TAFE では「より実践的な知識と技術の養成、すぐに就職に結びつく職業訓練」を目的としており、TAFE と地域の産業界・商業界・職業団体とは密接に連携しています。地域により差はありますが、Junior Secondary School 修了生の 40 ~ 70 % が TAFE に進学するとのことであり、全オーストラリアで認知されている教育機関です。

分野として工学・デザイン・芸術・音楽や演劇・スポーツ・観光・ビジネス・社会福祉・調理など 100 前後のコースがあります。大学生や企業の人々が TAFE に来て技術訓練を受けることもできます。また、中学校生徒の TAFE での実習訓練を引き受けています



オーストラリアを訪問した森先生

が、これは TAFE を良く知り、TAFE への進学に意欲を引き出す効果があると思われます。TAFE の学生が大学の単位を取得することも可能です。既に仕事を持っている人がパートタイムの学生として夜間や空いた時間に訓練を受けるコースもあります。

TAFE で技術や知識を修得した証明としての Diploma (3 年程度)、Associate Diploma (1.5 年 ~ 2 年程度)、Certificate I・II・III・IV (2 年 ~ 6 ヶ月)、を取得できます。さらに高等教育としての Associate Degree, Bachelor Degree など取得できるコースもあり、これらの資格はオーストラリア政府が認定したものであり、どこの TAFE で取得しても別の大学や TAFE で認定・互換されるので、大学を含めた進学やレベルアップの就職のために非常に役立つとのことでした。

今回の視察を通して、本校で実施されている中学生のための体験セミナー、高専と大学との連携による単位互換制度、専攻科のサマーレクチャー、大学・産業界の委員による外部評価委員会、地域企業との共同研究による地域貢献などは意義あることであり、たいへん重要であると感じました。



オーストラリア・パースの Central TAFE
Kurume National College of Technology



イギリスを訪問した中尾先生、ケンブリッジ大学を背景に

クラブ部室の改修工事と配置替え

学生主事 松井 悟

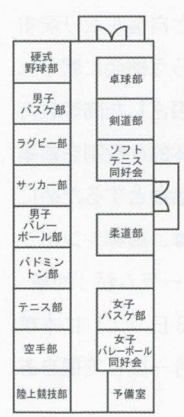
これまで本校学生の課外活動に使用するクラブ部室は、第一体育館北側の旧部室を13団体、野球場東側の新部室を9団体で使用していましたが、絶対数が不足しており部室を持たないクラブが残されるなど、懸案を抱えたままの状況にありました。

そこに、本年度高専機構が旧部室の耐震補強工事を行うことを決定しましたので、これに合わせて部室不足を解消することを計画し、予算面では後援会にも一部支援をお願いして、新・旧部室内部の間仕切りと電気配線の改修工事を実施しました。

平成20年度からは図に示すように部屋の配置を変更し、最大30団体までに部室を提供できる体制が整います。また、軽音楽部の練習場所もプレハブではありますが防音対策と電気配線を施した建屋を体育器具庫南側の空き地に設置することとしました。

これで従来からの懸案も大部分が解消し、課外活動の共用施設として設けられた練心館も、整備すれば本来の使用目的である合宿時の宿泊所などに活用することが可能な状況となりました。

新 部 室



旧 部 室

予備室	新聞・文芸同好会	ブロン同好会	ロボコン部	模型部	手洗い場	清掃管理室
ピアノ同好会	囲碁将棋部	自動車部	作業場	合気道場	中央執行委員会	
英会話部		エコパワー同好会	合気道部		実行委員会	

情報オリンピックに参加して

制御情報工学科 安藤 翔平

春休みの間に行われた日本情報オリンピック春合宿に参加してきました。以下に感想を述べます。

出された問題はやはり予選・本選と比較して明らかに難しくなっており、試験終了後に解説を聞いてもよく理解できないものもありました。

やはり他の参加者の方は優秀で、試験結果を見ても、問題の把握や実装が流石に速いと感じました。中には数学オリンピックの成績優秀者もあり、合宿中に行われた講義でも、説明が高度な部分に及んだ時にも支障なく理解しているようで、年齢的には自分以下なのにすごいな、と思いました。

一週間という短い期間でしたが、とても有意義な時間を過ごすことができました。

自分は年齢制限で今年が最後の機会だったので、来年は後輩が優秀な成績を修められるよう応援し、自身も知識を深められるよう努力したいです。



第13回高専シンポジウムを終えて

第13回高専シンポジウム会場の様子



特別講演される国立高専機構の河村潤子理事



高専生の研究発表の様子



活発な討論が行われたポスター発表の様子



大勢の観客でにぎわう

福岡県3高専対抗ロボットコンテスト

【お詫びと訂正】

「高専通信」2008年冬号の篠山小学校で行われた体験イベント「科学の日」の記事において、[一般理科の乗用ホバークラフトによる参加]が欠落しておりました。お詫びして訂正させていただきます。

高専シンポジウム実行委員長 馬越 幹男
副実行委員長 中嶋 裕之

「高専通信」平成19年度秋号にご案内しましたように、全国35高専の高専生、教員、大学関係者、企業関係者並びに市民の方を多数迎え、「第13回高専シンポジウムin久留米」が平成20年1月26日・27日の両日、石橋文化センターを会場に開催され、盛会のうちに幕を閉じました。

参加者総数は1300人を数え、久留米高専の存在を高専関係者ばかりでなく地域の人たちにもアピールできたと思います。これもひとえに久留米高専の教職員の方々と本科4、5年生、専攻科生諸君のご協力の賜物と深く感謝します。特に、60名以上の学生諸君の研究発表、200名を超える学生諸君の運営への協力には、さすが久留米高専の学生だと改めて感服しました。

高専シンポジウムはすでに高専生の研究発表の場として定着しています。今回は、これらの研究分野の拡大に加えて、地域連携を大きなテーマに掲げ、特別講演会「高専の社会的役割について考える」、シンポジウム「地域環境と食育」、中学生・市民のための技術講演、企業等の最新技術展示、福岡県3高専ロボットコンテスト、中学生のための進路相談室と多彩なイベントを企画しました。本シンポジウムの創設者である鳥井昭美特命教授のご指導のもと、1年以上前から準備に取りかかり、イベントの企画、会場の確保、関係団体への支援依頼、特別講演者の依頼と奔走してきましたが、新しい企画が多く、戸惑うことばかりでした。幸い、国立高専機構、全国の高専、久留米市、久留米市教育委員会、地元の大学・企業等のご支援によりまして、多くのイベントに賞賛の声をもらっています。これらのイベントについて、現在本校の下記のサイトには多数の写真が掲載されていますので、ぜひご覧ください。

<http://aries.cc.kurume-nct.ac.jp/sympo/>

高専シンポジウムの開催が、久留米高専の誇りと自信を取り戻すとともに、高専を広く一般市民の方にも知ってもらう機会に繋がれば、本当にありがたいことです。しかし、地元根ざした高等教育機関の一員となって、地域連携に関する高専の具体的な役割を構築し、地域連携を継続的、かつ真に地域に根ざした活動とするためには、さらに地固めをする必要があります。今年度は、高専シンポジウムのもとになった第18回九州沖縄地区高専フォーラムが「地域産業と市民の連携を目指して」をテーマに12月6日(土)に本校を会場に開催されることが決まっていますので、今一度ご支援をお願いします。

本号掲載記事の無断転載を禁止します